

田中 お二人はお会いするのは初めてですか？

伴場 何度かお見掛けしたことはありましたが、きちんとお話しするのは初めてです。

松島 実はつい数カ月前にも、絵を描いて自分の考えを表現するというワークショップに参加した際に偶然お会いしました。

伴場 そうなんです。なかなか2時間集中して絵を

巻頭

対談

特集グローバル人材

世界と手をつなごう

描く機会ってないので面白いんです(笑)。

—— お二人は以前カンボジアにいらしたり、現在は日本の人々を、つなぐ活動をしていたりと共通点がありますね。開発途上国とつながりを持つたきっかけは何だったのでしょうか？

松島 私は、父がカンボジアでNGOを創業し、現地に病院を建てる計画に携わっていたので、完成したときに家族で訪れたことがきっかけです。当時、私は12歳ぐらいでしたが、設備や人材も十分とは言えない環境の中、懸命に取り組む人々を見て感動し、大学時代はそこでボランティアをしたり、別のNGOで働いたり、社会人になってから国際協力に携われるように経験を積みました。

伴場 僕は、大学卒業後は地元の福島で銀行員をしていましたが、『貧困なき世界をめざす銀行家』と

いうムハマド・ユヌス氏の自伝をたまたま読んで、「自分の仕事はこれだ！」と思ったんです。それから医療系の国際NGOに転職して、カンボジアやアフリカで仕事をしました。

—— 違う世界に飛び込むことは怖くありませんでしたか？

伴場 当時はNGO自体がまだまだあまり認知されていなかったもので、周りには猛反対されました。ただ、30歳という年齢までに動かなければその先ずっと動けないと思い、28歳の誕生日に思い切って銀行に退職届を提出しました。

松島 私は大学卒業後はまずコンサルティング会社に就職しました。その理由は、これからの国際協力の形を考えたときに、民間企業やビジネスの力が重



〈聞き手〉 JICA 広報室長 田中雅彦

「グローバル人材」という言葉が頻繁に使われるようになった昨今、ビジネスやボランティアなどを通じて、多くの人が世界と関わりを持っている。一方、国内に目を向けると、こうした海外経験を生かし、多方面で活躍する人たちが増えている。共に国際協力の経験者で、現在は国内を拠点に活動を展開している二人に、これからの時代に求められるグローバル人材像を聞いた。

要になると思ったからで、ゆくゆくはNGOの世界に行くことを望んでいました。会社を辞めようと決心してからは、親を説得するために、資料を準備して自分の思いをプレゼンしました。

日本から離れた地で学んだこと

—— 今の仕事の中で、途上国での経験が生かされていると感じることはありますか？

伴場 東日本大震災の後、支援活動を行うために福島に戻りました。物資の配布などできることから始めていたとき、途上国と一緒に働いていた友人が来てくれて、一般社団法人 Bridge for Fukushima を立ち上げようという話になったんです。これまで開発の仕事に携わってきたので、震災後のフェーズ分け、つまり、緊急救援、復興、経済発展といった段階に分け、その段階に応じた支援計画を立てることは比較的早期にできました。

—— 途上国のプロジェクトで培った知見が生かされたということですね。

伴場 そうなんです。自分は緊急救援より復興の専門だと思いい、その中で何ができるかを考えました。その結果見えてきたのは、これから数十年単位で復興に取り組んでいく上で圧倒的にプレーヤーが足りないということ。そこで、高校生のリーダー育成事業を始め、幅広い業界の社会人から仕事の話を聞く会や、高校生が日常の中で感じる課題を発表し、解決策を事業化する活動などに取り組んでいます。

松島 私の場合は、4年前にNPO法人クロスフィールズを友人と立ち上げ、日本企業で働く社員を途上国に派遣し、現地の人々と共に社会課題の解決に挑む「留職」プログラムを実施しています。日本と異なる環境で挑戦する意味などを企業側に説明する際には、自分自身の経験が生きています。また、起



松島 由佳さん

伴場 賢一さん

NPO 法人クロスフィールズ 共同創業者・副代表

東京大学経済学部卒業。在学中、カンボジアの児童買春問題の解決を目指すNPOのスタッフとして勤務。卒業後は外資系コンサルティングファームに入社し、2011年にNPO法人クロスフィールズを共同創業。日本企業の社員を途上国のNPOなどに派遣し、現地で社会課題の解決に挑む「留職」プログラムを軸に事業を展開している。

一般社団法人 Bridge for Fukushima 代表理事

地元福島の銀行から医療系NGOに転職し、カンボジアやザンビアで事業を統括。国連食糧農業機関 (FAO) でコンサルタントとして勤務した後、JICA海外長期研修生として英ロンドン・スクール・オブ・エコノミクスに修士留学。社会政策学を学ぶ。2011年の震災後、一般社団法人 Bridge for Fukushima を立ち上げ、高校生のリーダー人材育成や産業育成プログラムを行っている。

業当時は何も無い状態から道を作っていくかなければなりませんでしたが、行政サービスや制度が整っていない途上国ではそれは当たり前のこと。それでも自分たちで何とかしようという行動を起こすバイタリティーは、途上国での経験から得ました。

これからの時代を動かす力に

—— 最後に、お二人が考えるグローバル人材像を教えてくださいませんか？

松島 私は、「国境を越えて信頼を築く力」だと思います。もちろん日本人同士でも大事なことです。それが違う国の人であっても、その人の考えやバックグラウンドなどを想像し、お互いに信頼し合える力は、グローバルに活躍する人のベースになってい

ると思います。

伴場 僕は、どこに行っても誰かの役に立つ、どんな環境でも自分の色を出して最大限の仕事をするといった「自分の役割を見いだす人」だと思います。福島でも、周りのことを理解し、地域の中で自分の役割を果たしている方々を見て、たとえ海外に行ったことはなくても、どこの国でも通用する力を持つまさにグローバル人材がたくさんいるなあと感じました。

—— グローバル人材は決して特別な人ではなく、実は身近な所でも活躍しているんじゃないでしょうか。

松島 問題を他人事ではなく自分の事として考えて行動できる人は、日本社会の中でも求められている気がします。留職プログラムを通じてそういう方々がたくさん生まれていて、大きな可能性を感じています。

伴場 すごくワクワクしますよね。福島の高校生たちの将来も本当に楽しみです。

